

普通文に就ての話 : 論説

著者	？本，植
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 2
ページ	1 - 1 7
発行年	1893-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2298/4157

龍南會雅談第貳拾貳號

論 說

普通文に就ての話

助教授 黒 本 植

物徂徠の説に、支那人は學問の事をいふよりは、いつも讀書云々、學問は讀書にありといふ、我は、さは覺えず、書を見るよしらずとれもへる、いふよといふに、支那と本邦とは、語音の違ひあればあり、要するに、本邦の人、耳口の二は、皆益にたらずといふべしとあり、是は、わが邦人の漢書をよむにつき、て、その不便をいはれまにぞありける、語弊なきにはあらざれども、その實をいはい、かくあるべしや、太宰春臺の説にも、支那人の書をよむといふは、書を見るをいふなり、別に看書の字は、あれども、俗言なり、雅言には、讀書とのみぞある、この方の人、は、讀書と看書とを分ちて、その事は、同じからず、その故は、和讀に顛倒ありて、助語を遺す、されば只口によみたるのみにては、漢文の義理はみえがたき、目にてその文字をみて、さてその上下の位置、助語の緩急、一々その變化異同を思ひはかり、全く支那人の書をよむ心にありて、初めてその文の條理は、識得せらるべし、是れ和漢讀書の同じうらぬ所あり云々とあり、この二説、げにもさることあり、支那人の漢書をよむは、よむまゝに、その意を會するは、わが邦の人の國文をよむがごとし、歐陽公の五代史を人によませて、その巧拙をきゝわけられしにつけても、れもひはすべし、されども、邦人の漢書をよむは、口にくさうめ、目に見ざれば、わからぬことあり、かくてこそ、この看書の説は出來にけれ、今の西洋の書も、もし顛倒をつけて

よみたらんには、是れに同じかるべくや、すべて、他國の文をうのまゝによまぬ時は、この不便は、免れざるるか、

抑是は、わが邦のみならず、今日交際せる國々にては、何れも、この不便は、多少あるべきあり、その自國の書をよむにしても、古今言語の變遷もあれば、今より中古以前の文をよむには、心えがたきふしゝのありて、手にとりてまざれば、げしがたきことのさはなるは、いふをまたざるべし、殊に我が邦のとき、漢語のいりゝたれる、洋語のうちまじはれる、國語の比較上、いと少くして、感ひやすき詞の多き、一層うの煩しきは覺ゆあり、

既にわが邦の文章には、かゝる種々の不便あり、これをは、今口に唱へて、耳にきゝ、耳口の二官をして、各うの用に立させんには、いかゝすべきといふに、こは別に工夫もなきものにて、先、人の顔色、聲の上下、詞の緩急、事の關係につきて、考ふれば、十のうち、七八分は、きゝわけらるべし、尤これは、何處の國々にても、同じ事なり、今兩人相對して、談話せんにも、一部始終、うの字をしり、うの事を弁ふる者にはあらず、大かた、右の四箇の工合によきて、その意は領會せらるゝあり、されば、聽官の方は、是にて暫く満足すべくとも、うの視官に訴へて、うの事は、直にうれと知易からしめんには、いかゝすべきといふに、是も別に妙策はなき者あるべし、まづ余が考にては、左の方法を務めて遵守すべき事とぞおもへる、

一 句讀を用ふべき事、

二 古來一定の假名に遵ふべき事、

三 漢語は、そのまゝ用ひて、讀方は便に従ひて付くべき事、

四 外國語は、片假名にてかき、漢字を填めざるべき事、

五 方言はある場合を除く外は、用ふまじき事、

六 一音の名詞には、漢字を填むべき事、

七 漢字の區別は、あらかた用ふべき事、

八 將來の新熟語は、体用の前後、語言の順逆、あるべく邦語の格によりてかきもし作りもすべき事、

右八箇の方法のうち、句讀を用ひんことは、事々しく今さら論ずる迄もなければ、姑らくおきて、第二の方法以下につきて、いさゝか論ずべし、

古來一定の假名に遵ふべき事、前にも論じたるごとく、我が國は、比較上、言語の區別、いと少き國がらにはあれども、それさへ、体用によりて、その稱謂を異にせるなどの事、いと多かり、其一二をいは、体の時は、イナ(魚)ミツ(水)ゼニ(錢)といひ、用の時は、魚をナ、(酒にそふるをサカナ)といふ類なり、水をモヒ(主水をモンド)といふは、モヒトリの約あり、(錢をアシと唱ふるなど、是あり、今日も牛を常にはウシといへど、食料にする時は、ギウといふ、英人の常にはフットといひ、食用にはビーフといふがごとし、近き頃、わが邦の人、英國にゆきて、うなたの人、牛肉を何と唱へらるゝと問ひけるふ、ウシといふと答へければ、さてく、日本はすまじき國とあるといひけりとぞ、この國に生れて、この國の詞を辨へざる、遂は國辱を海外に残すに至る、いひがひなき事どもあり、あへて、かくやうの事は、皆その詞を異にして、その嫌ひをさくるあり、便利なるものあり、假名にてもしり、古へより、オバ(祖母)チバ(伯母)オン(虚言)チン(痴鈍)オカシ(可憐)チカシ(可笑)イル(入)井ル(居)な

との區別あるは、看書上、大に便利を覺ゆる点とあり、是等は、只古書をよむに便あるのみならず、將來に傳へんも、後人の便、少くからざるべし、之かるを、何の心もなく、その區別を打破り、筆に任せてかきちらすは、抑いかにぞや、その甚き、新聞雜誌などには、何々チャとかくべきを、何々オヤとかき、カレハとかくべきを、カレワとかくなどは、妄の極とやいふべからん、猶その得失は、下段にあらん例をみてしりぬべし、

漢語は、うのまゝ用ひて、讀方は便に従ひて付くべき事、この事をいはんに先だちて、つら／＼古を稽ふるに、わが邦の昔は、正音のみありて、拗音などは、さら／＼あつりしとば、外國より入來りし拗音などは、其初は、務めて學びたるものにこそあつりけめ、いつしか、その音の口にはのらずして、終にわが邦の正音とはありけらし、これをたとへば、今日英語などのシ、テなどを、いうに英人の口眞似すとも、いつしかこの方のシ、テとされるがごとし、うの一をいはい、ジュシヤ（儒者）といふべきを、ズサといひ、ジュシヤといふべきも、ズサとなり、承和菊をンガキクといひ、清和井をセカ井といひしなど、關東人の今にても、關係をカンケイ觀世をカンゼといふがごとし、これを外國音を國音に直してかけるありといふ人もあるめれど、その實は、いひかたかりしをり、かゝる發音の語を、そのまゝに、假名にてかき、原語をうゝざりしもの、中古の物語文には、往々見えて、看書上、大に迷惑を生ずること、人のしる所あり、しかるに、後世の人、既にその音を十分にいひあらはすことの出來る比に至りても、猶古の例に倣ひて、かゝる語を用ひもし、書きもして、耳目の惑を起さするは、一向に不便を顧みざる人あるべし、されども、これは、和學者の擬古文に往々用ふる所にして、その弊、普く世に及ばされば、此に深くいふべきにもあらざれども、その原語をかゝる時は、人の惑を起す、尠からざれ

ば、今日普通文をうくに臨みては、その用意なくてやはあるべき、さてその漢語の讀を變じて、その義を異にせる、一人といへば、天子の事、一人といへば、平民一人の事、當今といへば、その世の天子の事、當今といへば、只今の事、和尚といへば、貴僧の稱、和尚といへば、その次の稱、正三位といへば、贈位の稱、正三位といへば、平常の稱なる類、その音よりて、その事うらを別てる、いとしき故實なれば、これらの類は、その便に従ひて、讀方をつくるも、初學に便なるへし、

外國語に片假名にてかき、漢字を填めざるべき事、今日翻譯書などの上、地名人名を初として、外國語は漢字をうつめてかける、地理歴史、醫方動植物の書には、いと多かり、是をらは、廢めてがあとを覺ゆる、うは、洋書をよみえざるものは、只その漢字につきて、あらぬ讀をつくるより、大に惑を生すればなりけり、かの英吉利、佛蘭西、華聖頓、伯林、などいふ國名のことき、その稱へも、既に加の方の稱へにあらず、かくかけるをみて、それとしらるゝも、只久々く用ひなれたる故にこうあれ、その他の詞に至りては、或は便利ありとおもふ人もあるへけれど、中々に通しかたし、現に小學の地理書に、漢字を填めたる地名の極めて多かるを、一々人に問はれて困却したることありき、醫書をとて、その病名のむつかしきに苦まむなども、多くはこの邊にあり、これらをは、一々假名にてかきたらんに、いかばかり便利ならんどうれもはるゝ、まして漢字を填めたらんは、その正音を悠久に傳ふる一端ともあるべきをや、或は又原語をうきて、その傍に發音を付すること、植物書などの、漢語にまじり邦の訓をつくるかことくするも、外國語を弘むるの一の方便あるへしや、とにもかくにも、その填字は、あちきなきことここにこそ、

凡て文字は、言語の符號にして、符號は、讀者の耳目を迷はせめざるか、最上なるへし、一度この方法

を誤まる時は、何とも讀下まかたぐ、何の益にもあらぬるかし、近比、武田勝頼滅亡記をみし、この書は、武田氏の一族ある勝沼氏の女の尼とありし理慶尼の作にて、侍女のうの語りまを、筆記せしものどろ、甲斐の土言のうち交はれるうへ、假名の違、漢語を假名にてかけるなど、いとよみかたきものあり、うの中の一節を掲ぐへし、

ろの事ゆつや見やこゑかくれなくしてもふすやうとうどの虎はけれをしみにほんの弓とりはぢれねしむともふすたとゑのいかに此れたとのは御めいゝまらせ玉ゑて天下に御なひろめかふたいにあけさせたまふ物かゑともふさぬ人ゝなかりける又このよのあらましをとりあつめし物はかし山をにて一屋御屋とまいらせしものなり世をくゑんしみるににんけん五十年るてんの内れたとふれはてんくゑうちやう路いまの火ゆめまほろまのおとくあるに世のいとなみにうちおよい末のやみしをいゝせん云々

是をよむに、誠にやみちをたどるやうありけり、漢學の力あるもの、假名違のこゆるものさへ、いと心配すある、まして漢學の力、和學の力あき者によませんには、はとく、缺舌にちかゝりあん前にもいへるか如く、中古の物語文などをよむに、とかくよこにくきは、文章の高妙あるうへに、言語の變遷と、例の漢語の國語に變えたるを、假名にてかけるなどある故ありかゑ、されど、大方は、それと意得らるゝは、詞葉文字に、一定の規則ありて、少しも違はざるゆゑにうけりける、即ち、イ、井、エ、ユ、ワ、ハ、あとの定まざるゝこと、漢字の万古不變なる、洋語の綴に、一定不動の規矩あるゝことし、皆是れ同文の貴き所にして、視官に便を與ふる、うの利こゝにあり、この一定不變の格に、數百千年の間、億万人の目をさらし、祖より父、父より子、孫、とその傳を遺し、うの格だに變らねは、いかに婦人小兒とい

ふども、たやまぐろの意は、取られぬへし、一たひその格を破り、その法を亂さん時は、聽官にこそ、僅にその上下の關係を考へて、分つへけれ、視官に至りては、言語か相手にあらずして、文字詞遣か相手ある故、忽、目惑をう生えぬる、右の文をよみて、さどらるへし、今これを普通の文字語格に直せば、左のことくある、

この事、吾妻京都へ隠れかくえて、申すやう、唐土の虎は、毛を惜み、日本の弓取は、名を惜むと申す、譬のいかに、この武田殿は、御命變らせ給ひて、天下に御名を弘め、後代に擧げさせ給ふ物か、と申さぬ人なかりける、又この世のあらまき、とり集めし者は、拍尾にて、一夜御宿參らせし者あり、世を觀しみるに、人間五十年、流轉の中を、譬ふれば、電光朝露、石火夢幻のおどくあるに、世の營にうちまよひ、末の關路をいかうせん云云、

かくかきたらんには、何てふ事かあらん、うは、僅にるをへに、れををにかへ、さて漢語の假名にてかけるを、もとにかへしたるのみなれども、既にかゝり、假名にてかけは、他に目惑ふ詞の多く、漢字は漢字にてかけは、この患の省うるゝと、數千年間、一定の語格は、邦人の耳目に浸漏しけるにこそよる事なれ、この習慣の出來たるは、豈我か邦のこよあき幸あらすや、これにて、邦語は、邦語の格に従ひ、外來の語は、外來の語のまゝにかくことの至便至利あることは、悟られぬへし、

方言は、ある場合を除く外は、用ふまじき事、世人動もすれば、文章は達意にありといひて、うの達意の器を擇はざるは、急報せんと欲して、雷器をからざるかことえ、うの意、あとか彼に達すへき、達意の器とは、何ろ、一國普通の言文これか、この言文にして、普通の者からすは、達意も空の空に歸すへきか、故に孔聖も、文は文あらされは、遠きに行はれすともいはれたり、文とは、その語を美

にするあり、西洋の學者よも、文法は只作文の楷梯のこにはあらず、これを完美にする器なりともいひし人あり、その意も、こゝにやあらん、故に孔聖詩二百篇を削るといひしも、只あらゆる詩の中を削りて、三百篇とせられたるのこあらす、その詩を刪正して、一定の語格に合せしあり、元來、詩といふは、漢の學者は、詩經と名つけて、僧侶の法華經などを敵するかおとく尊へども、その實は、まか邦の端頃や、都々逸のときをも、集めて、その中を削りもし、正しもして、擧げたるものにて、孔子の比は、詩經は、今日の新聞紙を代用したるものにこそあれは、古の新聞雜報とまもいひつへし、かの雅頌などころは、學者先生の作あれ、國風に至りては、大かた、右にいへる俗謡の類をまは、皆匹夫匹婦の、酒飲めは、面白しとうたひ、苦界にあれば、悲しとかこち、仁政の下にては、その浩澤を謳歌し、苛政の下にては、その壓制を刺譏したるものあれば、野夫悲歡の聲は、直に當時政事家の耳目より反響して、施政の方針をとる警戒ともあり、地方の風俗を知る辻占ともあるる故、これを采り、これを輯めて、さてこそ在上君子の頂上に一鍼を與へられしなれ、されど、孔聖の刪正なき前までは、例の方言ましろあれは、北海土人の方言を、中國人のこるかこどく、何ともまからさること多かれは、遠きに達するやうもあま、これ孔聖の刪正を加へられし故ありけり、只それこれを刪正せしによりて、支那の當時のみならず、我々日本人までも、しらるゝにあらすや、漢の楊子方言といふものは、多く方言を集めたるものあれば、通せぬこといとさはあり、ゆきてこるへし、まか邦にても、亦しかり、かつて、友人荻野禮卿より送られざる國學和歌改良論の中に、佐渡の人をまは、その郷里の俗謡ありとて、二首出したり、その歌に、

たどひ姑か鬼でも蛇でも、可愛どのこの親じや者、

これは、我が邦のいづこの人とても、解せらるへし、普通の語格を用ひて、その辭、やゝ文なればなり、達意とは、かうやうの所にもやあらん、しかるに、今一あり、

粉するさへ、こがいた、どのゝ夏山、どかいたやら、

この歌の心は、たのれは、家にて粉ひくさへ、このやうに、暑く苦まきを、吾か夫のこの炎天に山に出てゝ木こりせらるゝ、その熱さいかはかりあるらんと、妻の夫をたもひし方言の歌なりとや、これをきてれもふへし、何くよも、この方言といふものありて、日常互にその地にて意を通はすは、多くはこの方言あり、されは、方言にてかきつゝらは、皆この類なり、何うたのか意を遠きよ達することをうへき、これを

粉ひく我さへ熱いもの、どのゝ夏山いかはかり

と直せば、いかに、大かたは、遠の人にもまかりぬへし、孔聖か詩を刪正せらるしも、その意をとりて、その言を直されまもの、かくやありけん、これによりてみれば、文語はいうにも擇ふべきまあること、しるかるへし、但傳記の中、その人、その處の言動有様を直寫せんには、この方言を用ひざるべからざることあり、これを除く外は、務めて方言を避けされは、達意の器も、その用はあさすとしるへし、

一音の名詞などには、漢字を填むべき事、我が邦の一音の名詞は、ふとまては、見あやまること、少あからず、従ひてその不便を覺ゆるあり、これらは、同じくは、漢字をかくを宜しとす、たとへは、目、手、蚊、爐、などのことし、その他、同詞異義の名詞も、漢字を用ふる方、便あるへし、箸、橋、端、などのおとし、これらは、口上にてよくその區別は、きこゆれども、筆下にては、分別しかたければなり、

れども、動詞は四音、或は三音以上の訓ある動詞をたきて、その他の一音二音の訓にてよむものは、漢字を用ふるに及ばずや、たとへば、キタル、オモムク、オモヒハカル、オモヒヤル、カンガフル、ダ、ダクスル、などの訓には、來、趣、應、想、考、正、の漢字を用ふへくとも、ワ、カ、コ、ソ、シ、イル、ユク、クル、サデ、ハタ、などの訓も、漢字を用ひて、吾ガ、彼ノ、是ノ、其ノ、爲テ、入ル、行ク、來ル、扱テ、將テ、などかけるは、今の世のあらひなれども、それらは、徒に時間を費やすものあり、されども、イル(入)イル(射)など、その場合によりて、ふと見のやまらん所は、漢字を用ふるも可なり、必しも、一概の論をたづるにはあらず、

漢字の區別は、あらかた用ふべき事、近來、漢學の衰へしより、從來、漢字の動詞、副詞、助辭、などのことくしく區別して來りしものを、一向に論せず、コレといへば、是、此、之、の別といはす、かきちらし、マタといへば、又、復、亦、の異を辨せず、かきつくるは、嘆はしきことにありける、漢字とても、今日は、又か邦の一種の詞あり、その精まき者を探りて、邦語の粗き所を助くるなり、吾か先王の漢字をとり用ひ給ひけん御心も、かうやうの所にもやあらむ、何とかその別を混すべき、まして、慣例の上にも心すべきまざるをや、まかるに、和文の方には、往々昔よりこのあらはしありて、後の文盲あるものは、遂に漢字のあて字によりて、その説をたて、古語をあらぬ方に説きあすより、本來の義は、終に冥々の中に埋没せられ、千載の後までも、何ともその義を明にするごとのあたはざるもの、數へろたし、古、邦訓を主として、漢字は、僅にその音をあらはす爲めに、あてたる時ころは、さてもありけめ、今日のことさ、漢語を多く用ひて、文かゝん世に至りては、あらかたその別をたて、文章よ用ひ、邦語の足らざる所を助けんは、先王の御心にも叶ふへし、まかるに、和文學者のもの

せる文には、今にその別をあさるる、往々見ゆめるそれたき、少年のかく文章に至りては、尤もその亂を極むといふへし、これも、古人のこぞく、事々しくいふは、好ましくらす、されども、右にひける文字などの區別は、たてたきものにこそ、就ては、その區別したきものを、左にかゝけて、その一端を示すへし、その區別すべき文字の上下に語を加へて、一の符をつけしは、そのやうの所に用ふるを示せるなり。

古の跡を尋ぬ

舊を改む

塚を發ぐ

心に思ふ

物る奢る

人に贈る

月の影

氷消ゆ

人を薦む

みづから恃む

席に立つ

海を臨む

人を佐く

踵を繼て起る

心を悛む

惡を討く

その痛を想ふ

人に傲る

人を送る

木の蔭

火熄ゆ

酒を勸む

人を頼む

席を起つ

海を望む

力を助ぐ

君に仕ふ
事を問ふ
治を謀る
固く孰る
花を挿む
人走す
牛を牽く
氣を嘘く
欄に倚る
仁に依る
物を頒つ
城を破ふる
心に耻つ
均しく是れ人あり
その誤を正す
是は
此の事
るを即

親に事ふ
人を訪ふ
物を計る
筆を把る
書を挟む
馬馳す
弓を彎く
毛を吹く
繩に縁る
城に據る
理を析つ
軍敗る
人に辱かしめらる
賢と齊うらんことを思ふ
その罪を糾す
之を
茲に
是に於て乃

(然らば則ちどの則の字はバの假名に依たる字なれば、用ゐる、)

徒に日をくらす

唯(只)これのこと

但しかゝることもあり

實の位の差にあらず

そのうへに又

是も亦

(復の字は、再の意あれば、再の字を用ひてもよき、)

つらく観るに

ふと見るに

あし易し

價賤し

逝きて歸らす

往きて又くる

假ひ云々すとも

譬へはかやうあるへし

夫れかくのことくあれば

其の人に存す

右やうの區別は、必ず詮義して用ひたゞ、その他は、類の近きよ應えて、これを轉用すへきは、文字活用の原則あり、されども、その中、たのづから本義慣例などありて、惡を發くとはいへども、塚を許くとはいはれず、火消とはかけども、氷熄とはかゝれさることく、彼には通用すれども、是には通用せざるなどの詞あり、よくよく心して用ふへきにや、近比「新ヲ歡ヒ奇ヲ好ム」とかけるものあり、「新ヲ喜フ」の字はあれども「歡新」の語やあるへき、あへて今人は、文字語格を度外にたきて、キトイへば、いかある假名を用ふるも、よきやうにれどもひ、漢字の訓にてはコレといへば、いかあるコレの文字を用ふるも、さえ支へなきやうにかきつくるは、甚しといふへし、さえども、前にもいへるかことく、從前の助字辭をみて、かまひすしいひのゝしるは、いらぬことあり、たどへば、ア、といふに、嗚乎、於

乎、吁、咨、噫、惡、嗟夫、於戲、などの字を用ひて、俗人を驚かすは、漢文こそそのやうの入用もあらめ、この方の普通文には、一向に用ふべきことあり、大抵、嗚乎、吁などの二種にて、足りあん、それらの字より、今少し必用の所に區別してがたどつたはゆる、一体、又か邦の詞は、少に失し、支那の文字は、多に失す、故にその弊皆同之、これをうちあはせて、初めてその美は致さるへし、

爾後の新熟語は、体用の前後、語言の順逆、なるへく、邦語の格によりてかきもし、作りもすへき事、熟語には、体用先後の殊なるあり、支那の熟語はすへて、用を先にして、体を後にし、我が邦は、体を先にして用を後にす、これ全く反對あり、おへて、物は体ありて後用あり、然るに支那の熟語は、用を先にして体を後にせるは、顛倒なりと笑ひし人も、古ありしか、その顛倒のいかんは、さてわきて、又か邦にて、今後何れを用ひて、新熟語を作るへきにや、或は邦語の格によるものあれば、或は漢語によるもあり、これは、何れ一に定めべきものになんらうける、されはとて、從來用ひかれたる漢語は、今さらに、邦語の格に改めんも、出來へきにあらす、はたこれを改めたらんには、俗人の耳目をれどろかき、中々にその不便は出來へし、されは、從來の熟語はそのまゝに用ひんは、さることながら、おれより後の新熟語は、あるへく邦語の格によりて、草創すへきにやとわれもふ、一國の語格は、一國人の体格のことく、体格の中に、一國の精神は、宿れるものあれば、支那の熟語は、いかに体用を顛倒せりと譏をうくとも、千古これを改めざるかとし、まゝて漢文を用ふる世の中あらは、漢語の格にこそよることもあらめ、今日のことき、漸やく一國獨立の文章をたてんと欲する世の中に、何を苦みてか、漢語の格によるへきや、況や又邦語の格、万々天理に叶へるもれとすへきに於てをや、これ余の漢語の格によることを取らざる故にそのある、さてその体用前後の、和漢、各その位置を異にせる例を、い

さうかあけて、いはゞ、左のあとし、

飲酒家

喫茶話

觀花

觀月

騎馬

登山

泛舟

讀書

試筆

懸命

折角

開校

開店

傳言

この類は、皆漢語の格にして、その格、何れも動詞先にして、名詞後あり、これを邦語の格にいふ時は、左のことし、

酒のみ

茶のみ話

花見

月見

馬のり

山ふみ

舟あろひ

書見

書ぞめ

命かけ

骨をり

學校開き

店ひらき

言つけ

今日、この格によりて、設けたる熟語は、左のことし、

政事始ハジメ

權限爭アランヒ

戶籍調シラベ

管轄替カヘ

この類のやうにいふこそ、又か邦人の自然の口語あるべきを、強ひて漢語の格によりて作り出せるものは、左のことし

多額納稅者

對議會策

被雇者

被選舉權

可成的

可及的

これらも、邦文の格に據りて、

多額稅納人

議會對策

雇はれ人

選はれ權

あるへく

及ふたけ

さといはゞ、目に一個の文字をしらぬものにも、さう易かるべきをや、すへて、右のやうにいひてもありあんを、強ちよ漢語の格を用ひて、俗人にさかするより、はてくは、「開校ヒラキ」、或は「外海ヲ航海スル」さといふものあり、腹をさゝへつへし、とかくこの方の人は、文字語格を度外におく癖にひさかへて、法律規則を初めて、何の文章によらず、堅苦しさ文字をあらへて、學者ぶる者れ多きう、文化

の一大障害物ありける、右の外、邦語と漢語には、れのつから順逆の異なるあり、これらをもしらされは、國文の體質をや欠かん、たとへは左の類のことぞ

邦 語 漢 語

ゆめかせ 風 雨

うみやま 山 海

あつふゆ 冬 夏

邦 語 漢 語

あゝかせ 風 波

よるひる 晝 夜

めをと 夫 婦

かやうの別あるは、皆れのつからうの國々の詞のしらへあれば、その調たる國ふりあれば、うの文も、れのつから國ふりに近つくへし、これらは、あまり拘はるへきにもあらされど、その國の性格を保たんよりいは、かうやうの所にも、心すへきにこそ、歌などには、尤もこのしらへを心えでは、えあらぬことなりかし、

かく内外の文字語格をつきあはせて、うの美を存し、うの長を取り、その見やすきを用ひ、うの惑ひやすきを除き、もて一定普通の文格を立て、これを持し、これを助け、全國のもの、皆この方向にすゝみて、うの尙ふ所をつゆ異にせず、その定まりし所をいさゝかも亂さずして、用ひゆかは、百年たゝすして、儼然たる一國達意の器も弘まるへし、千万人の耳目、終始この間にあらは、聽官もろの益をみえ、視官もろの働ををし、口耳目の三つ、初めてうの用を完うするに至るへし、今日我々か耳目の讀書上、看書上に、おさくその用をみすは、皆二千年以來の祖先か、一定の文字詞葉を創めもし採りもして、これを持続せられし餘澤あり、うの恩堂大あらすや、されは、今日よりも、はたまたか邦普通の文格を定めて、これを固く執つて傳へたらんには、百千年後の子孫には、いかはうりの福祉を與へんも、測られ

す、これに何くれと陳述せる所以ありけり、

注意の理法

杉山 富樫

吾人の境遇は常に全一あるものに非ず、而て吾人の事物亦た單一ある能はず。されば吾人は吾人の四圍にある事物及び現象に對するや、必ず親切ある注意をなし、周到なる配慮を要す。若し吾人或る事物に對して之に心意を注射することなくんば、其事物に對して得らるべき智識は、毫も之を收むる能はざるべし。其形跡大小狀態等より、其動靜及び性質に至るまで、吾人は之を注意よりて認識するを得るあり。即ち心意の發動は皆な注意に其端を發し、心意の官能は悉く注意に其源を取るものにして、吾人の智識と稱呼する所のものは、必ず先づ注意の關門を經過せざる可らず。人もし漫然鳴立澤に歩を移さは、果して何等の感慨あるべき。人もし茫然都市に佇立せば、果して如何なる觀察をかなし得らるべき。實に注意の作用は、心意の作用中最も緊要なる關係、價值ある位地を有するものありとす。此故に教育に關係あるものは、其教育者たると被教育者たるとを問はず、十分に注意の理法を考究せざる可らざるの必要起る。余試みに其概略を記述せん。

注意とは何ぞや、心意の如何なる狀態を云ふか。曰く注意とは或る物質若くば事物に對して、心意を活潑に傾注する作用あり。今一物を瞻視して以て之を知覺することを爲さざれば、心意は散漫せる狀態にあるべし、稱して之を不注意と云ふ。注意とは正に此不注意の狀態に反對せるものを云ふなり。尙ほ他言を以て之を云へば、注意の作用とは内外兩界の事物及び現象に就き、特に或る目的を撰みて他の目的を退け、心意を一方に傾注すると即ち是なり。